

江戸時代のし尿循環システム

日本におけるし尿の農地還元は、鎌倉時代(1185~1333)から本格化し、多肥営農の一環として採り入れられました。室町時代(1336~1573)中期にはほぼ全国的に普及したといわれ、安土桃山時代(1573~1603)に定着していました。その傾向は、都市化の進行に伴って増大していきました。

都市化が進行した江戸時代(1603~1868)には、農家のみならず、市街地の民家においても汲み取り便槽は大型化し、肥料供給源としての役割を担っていました。農家が町のし尿を集めるには、町の住民にお金を払い、または野菜をわたして、し尿を買集めました。このような仕組みは、し尿を農作物に必要な肥料の主な原料として確保する一方、し尿肥料で育った農作物を町の住民に消費してもらうルートも自然にできあがりしました。

このようなし尿循環システムは、1960年代まで続けられていました。

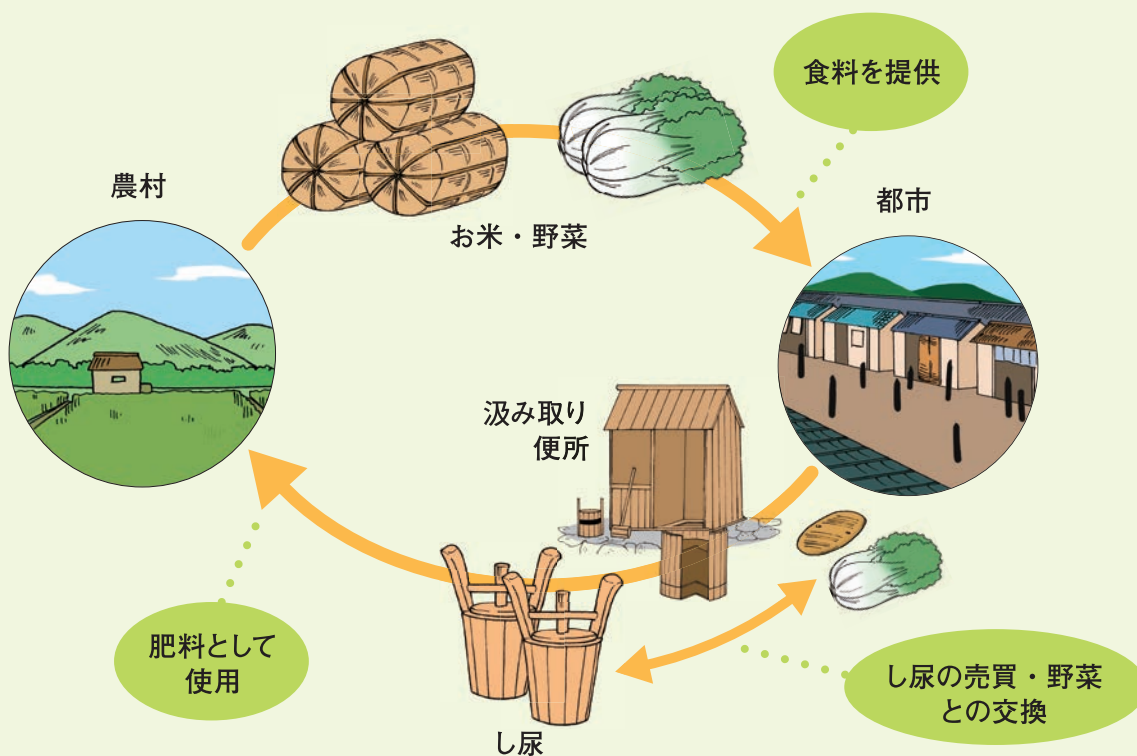


図-1 江戸時代のし尿循環システム



図-2 江戸時代のし尿収集運搬風景¹⁾

コラム1 ●江戸時代の下肥し尿の価格²⁾

輸送方法	施用時期	価格(1艘)	1桶当たりの価格	備考
舟輸送	田圃耕作時(春)	3分~1両	19-25文	1艘=160桶、1駄=8桶、1桶=30ℓ 1両=4分、1分=4朱、1朱=250文 現在の通貨に換算すると 1USドル=100円=4文
	麦畑耕作時(秋)	2分2朱~3分	14-19文	
	中間期(夏・冬)	2分2朱	14文	
陸路輸送		1分(3駄半~5駄)	25-36文	